

# 理学療法士養成に関する諸尺度の分析

前田 智香子

## はじめに

本邦における理学療法士の養成を取り巻く現状は、44年の歴史のなかで急激に変化している。特筆すべきは、養成校の増加の経緯であろう。特に2000年以降の増加は著しく、毎年9～22校が開設・増設され、2007年には218校（1学年定員数：11,646名）にまで膨れ上がっている（社）日本理学療法士協会、2007）（図1）。

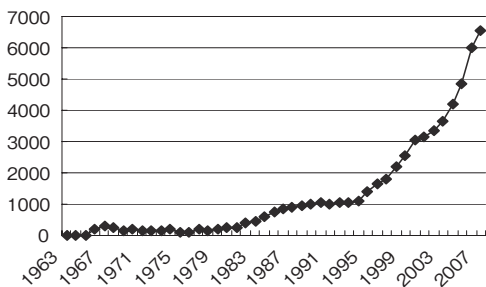


図1 国家試験合格者数

（社）日本理学療法士協会、2007より著者作成

このため、教員や臨床実習（以下、実習）施設の不足や、少子化の影響による入学試験合格率の上昇が生じ、理学療法士の質の低下が懸念されている。にもかかわらず、全入時代を間近にしてもなお、養成校の開設・増設は止まることを知らず、間もなく毎年1万人もの理学療法士が社会に送り出される時代がやってくる。

医学教育における教育目標はブルームのタクソノミー（認知領域・情意領域・精神運動領域）が用いられる（大橋、2000）が、各校の教育目標は様々で未整理であるとされている（萩

島、2000）。適切な教育を行うには、適切に評価する必要があり、評価すべき要素を明確にする必要がある。

このため、前田・吉良（2007）は最終学年次の実習成績における因果モデルの構築を試みた（図2）。その結果、「実習成績」には認知領域である「学力」は関係がなく、情意領域・精神運動領域の「技術力」・「適応力」が関係のあることが示唆された。「適応力」から「実習成績」へのパス係数は.36（ $p=.052$ ）であった。しかし、被調査者数が43名と少なく、質問紙調査の項目にも偏りがあったため、被調査者数を増やすとともに、使用する質問紙について精査し、さらに検討する必要があると考えた。

そこで、養成校の最終学年次生の心的要因を知るための予備調査として、前田・吉良（2007）が用いた質問紙に既存の質問紙を加えて調査を実施し、質問項目を取捨選択することを目的に本研究を行った。

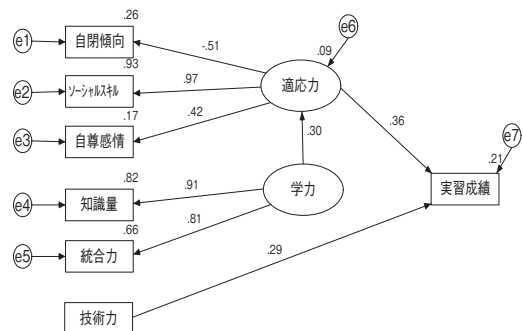


図2 実習成績の因果モデル  
（前田・吉良、2007）

## 方法

被調査者は、回答依頼時に文書と口頭で説明合意を得た私立3年制のA専門学校の最終学年次生42名（男性22名、女性20名、平均年齢 $22.71 \pm 4.47$ 歳）とした。調査時期は、最終学年次の実習終了後の2006年11月、調査方法は授業後に筆者によって集合調査形式で実施した。実施時間は約20分で、回答後の質問紙は調査当日に回収した。

まず、前田・吉良（2007）が用いた尺度について述べる。理学療法士にとって人との良好な関係を作り維持することはもっとも基本的な学習課題である（萩島，2000）ため、社会的スキル（対人関係を円滑にするために役立つ技能）を身につけている程度を測るKikuchi's Social Skill Scale・18項目版（KiSS-18）（菊池，1988）を用いた。これは18項目・5肢選択の尺度である。

次に、実習で問題となる学生の特徴として自閉症スペクトラムの特徴がみられることからAutism-Spectrum Quotient（AQ）（若林，2003）を用いた。これは自閉症スペクトラム仮説に基づき作成された健常範囲の知能をもつ成人の自閉症傾向（自閉症的特性）あるいはその幅広い表現型の程度を測定するもので、50項目・4肢強制選択法で、各項目で自閉傾向とさせる側に回答すると1点が与えられる尺度である。

また、高機能自閉症スペクトラムの成人は、対人関係や社会適応の未熟さに悩み、自己評価が低くなることがあるとされる（星野，1999）こと、自尊心が高いと援助行動に結びつきやすいとされている（二宮，1994）ことから、自尊心尺度（山本・松井・山成，1982）を用いた。これは、自己の価値と能力に関する感覚および感情を評価する尺度としてローゼンバーグが作成したものを山本ら（1982）が邦訳した尺

度で、10項目・5肢選択の尺度である。

次に、本研究で新たに加えた既存の尺度について述べる。高橋（1994）は、学びが成り立つ条件の主なものとして、①学ぼうとする意欲（動機づけ）、②学ぼうとする力の成熟（レディネス）、③学びのなかのモデリングを挙げている。

まず、「学ぼうとする意欲（動機づけ）」の要素として、認知的欲求尺度（神山・藤原，1991）と達成動機測定尺度（堀野，1987）を用いた。認知的欲求尺度（神山・藤原，1991）は、カシオッポとペティによる動機づけの個人差を測定する尺度の日本語版で、15項目・7肢選択の尺度である。達成動機尺度（堀野，1987）は、達成動機を個々人がそれぞれ異なって自己を高めるといふ、いわば達成動機の源としての「自己充實的達成動機」と、社会の中で他者と競うことによって自己を高めていく「競争的達成動機」の2つの側面から達成動機をとらえたもので、23項目・7肢選択の尺度である。

また、理学療法士には自己や対象者の将来への見通しをもつことが必要であるため、ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体としての「時間的展望」も動機づけにとって重要な要素と考え、時間的展望体験尺度（白井，1994，1997）を加えることにした。この尺度は目標指向性・希望・現在の充実感・過去受容の下位尺度からなり、18項目・5肢選択である。

次に、理学療法士には医療事故防止や、適切な評価・治療を行うために慎重さが求められる。また、他者から信頼されるためには時間・約束の遵守や感情のコントロールが必要である。これらを測るため、「学ぼうとする力の成熟（レディネス）」の要素として、認知的熟慮－衝動性尺度（滝間・坂元，1991）、ウェンダー・ユタ評価尺度（ウェンダー，2002）を加えた。認知的熟慮－衝動性尺度（滝間・坂元，1991）は、

ものごとをじっくり考え慎重に結論を下す傾向を測るもので、10項目・4肢強制選択の尺度である。ウェンダー・ユタ評価尺度（ウェンダー、2002）は、成人の注意・欠陥多動性傾向を測るもので、61項目・5肢強制選択の尺度で、そのうち25項目を採点に用いる尺度である。

次に、「学びのなかのモデリング」の要素として、援助行動にとって共感は動機として重要な要素とされている（菊池、1983）ことから、共感経験尺度改訂版（角田、1994）を加えた。角田（1991）は共感性の概念規定を、他者理解を前提とした感情・認知両アプローチを統合したものととらえ、他者理解に通じる共感が成立するには、他者との感情を分かちもつ共有機能と、自他の個別性の認識がなされる分離機能が統合的に働く必要があると考え、「共有経験」・「共感不全経験」の下位尺度からなる20項目7肢選択の尺度を作成している。

さらに、角田（1994）が、共感が生じる際、主体は客体に注意を向けており、他者を理解しようとする主体の能動的な関与なしに共感は起こりえないとしていることを踏まえ、他者意識尺度（辻、1993）を加えた。これは、他者への注意の向けやすさや方向を測定するための尺度で、他者の内面的情報を敏感に感じ、理解しようとする意識や関心を「内的他者意識」、他者の外面に表れた特性への注意や関心を「外的他者意識」、他者への空想的イメージに注意を焦点づけ、それを追いかける傾向を「空想的他者意識」とした3つの下位尺度からなり、15項目・5肢選択の尺度である。

本研究では、被調査者数が少ないことを考慮し、下位尺度や次元が複数あるものはそれを独立した項目（以下、項目）として分析することにした。

すなわち、KiSS-18を「初歩的なスキル」・「高度のスキル」・「感情処理のスキル」・「攻撃に代わるスキル（以下、攻撃代替スキル）」

「ストレスを処理するスキル（以下、ストレス処理スキル）」・「計画のスキル」として扱い、自尊感情尺度を「自尊感情」として扱った。AQを「社会的スキル」・「注意切り替え」・「細部への注意」・「コミュニケーション」・「想像力」として扱った。共感経験尺度改訂版を「共有経験」・「共感不全経験」として扱い、時間的展望体験尺度を「現在の充実感」・「目標指向性」・「過去受容」・「希望」として扱った。達成動機測定尺度を「自己充実の達成動機」・「競争的達成動機」として扱い、認知的熟慮－衝動性尺度を「熟慮性」として扱い、認知的欲求尺度を「認知欲求」として扱った。他者意識尺度を「内的他者意識」・「外的他者意識」・「空想的他者意識」として扱い、ウェンダー・ユタ評価尺度を「ADHD」として扱った（これ以降は項目名のみを使用する）。

以上、本研究で用いた項目は26項目となった。これに前田・吉良（2007）が用いた「技術力」・「統合力」・「知識量」・「実習成績」も加え項目単位で分析した。

## 結果

本研究では、まず各尺度の採点法にて各項目の得点を算出し、フロア効果・天井効果の有無を確認したが認められなかった。

その後、項目の評定方法が異なることを是正するため、各項目得点を標準化したものを各項目のデータとした。そして、相関関係とクラスター分析、Cronbachの $\alpha$ 係数（以下、 $\alpha$ 係数）および因子分析を用いて項目の取捨選択を行った。

「実習成績」と相関が認められた項目は「ストレス処理スキル」（ $r=.28$ ,  $p<.05$ ）・「計画のスキル」（ $r=.44$ ,  $p<.01$ ）・「内的他者意識」（ $r=.35$ ,  $p<.05$ ）・「外的他者意識」（ $r=.47$ ,  $p<.01$ ）・「目標指向性」（ $r=.27$ ,  $p<.05$ ）・「認知

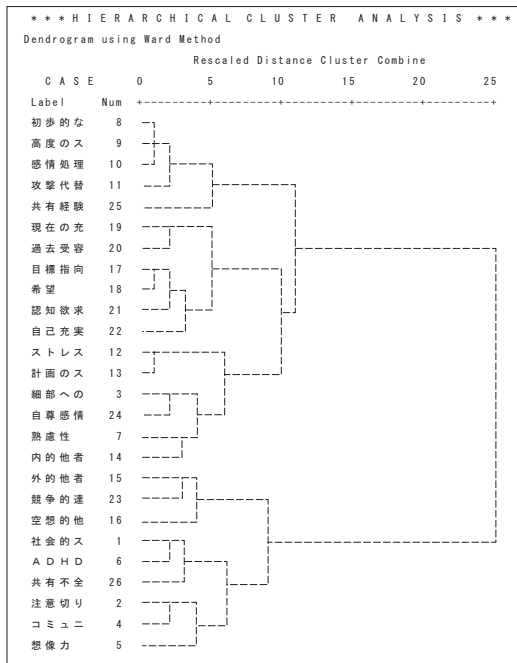


図3 第1回クラスター分析結果

欲求」(r=.31, p<.05)・「自己充實的達成動機」(r=.42, p<.01)・「競争的達成動機」(r=.28, p<.05)・「共有不全経験」(r=.31, p<.05)、「技術力」(r=.36, p<.01)であった。これら10項目とも相関がなかった項目は「細部への注意」・「過去受容」であった。

次に、質問項目26項目のクラスター分析を行った。方法は比較的明確なクラスター構造が得られ、心理学で常用法として使用される(山際・田中, 1997)ウォードの最小分散法(Ward's minimum variance method; 以下、Ward's法)を用いた。デンドログラムは図3に示す通りであった。また、26項目の $\alpha$ 係数は.786であった。さらに、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った結果、8因子構造となった(因子は固定値1.0以上で採用。KMOおよびBartlettの検定量は.560, p<.01。累積寄与率は62.084%)。パターン行列は表2、因子相関行列は表3に示した。

表2 因子分析結果(パターン行列)

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	h <sup>2</sup>
社会的スキル	-.904	-.076	.116	-.042	.087	-.092	.057	.083	.771
初歩的なスキル	.788	-.014	.224	.109	.047	.224	-.271	.047	.822
共有経験	.664	-.254	-.346	-.150	-.019	.240	.098	.059	.571
共有不全経験	-.647	.127	.132	-.030	-.110	.115	-.057	.081	.334
高度のスキル	.574	-.066	.431	-.112	-.120	-.041	.029	-.050	.707
攻撃代替スキル	.564	.033	.097	.176	.010	-.159	.067	.098	.500
ADHD	-.511	-.053	-.085	.278	-.145	.353	-.148	-.053	.556
感情処理のスキル	.465	-.033	.440	.249	.074	.047	.002	.140	.655
認知欲求	-.130	.831	.161	.082	.058	.019	-.200	-.108	.673
希望	-.034	.755	-.043	-.140	.036	.118	-.169	.244	.703
目標指向性	-.005	.616	.003	.037	-.237	.156	.127	.069	.576
熟慮性	-.034	.449	.052	.310	.312	.078	.181	-.133	.504
自己充實的達成動機	.209	.413	-.171	.004	.134	.285	.196	.231	.588
計画のスキル	-.189	.009	.823	.156	-.264	.124	.102	-.009	.668
ストレス処理スキル	.146	.115	.676	.133	.163	-.165	.036	-.052	.652
自尊心	.101	-.128	.273	.733	-.104	.062	.052	.036	.598
細部への注意	-.053	.113	.071	.608	.069	-.079	.081	.134	.434
注意切り替え	.089	.044	-.138	-.067	.985	.006	.023	-.142	.996
コミュニケーション	-.409	-.375	-.013	.193	.429	.124	.006	.293	.642
空想的他者意識	-.013	.102	-.225	.197	.004	.658	.061	-.231	.545
外的他者意識	-.125	.031	.435	-.358	.066	.629	.184	-.085	.827
競争的達成動機	.041	.200	.038	-.057	.000	.459	-.193	.071	.303
内的他者意識	-.034	-.189	.157	.085	.060	-.002	.969	-.038	.894
想像力	-.112	-.102	.098	-.273	.229	.121	-.388	-.062	.375
現在の充実感	-.116	.264	.000	-.144	-.084	-.105	.106	.719	.765
過去受容	.012	-.020	-.035	.311	-.070	-.092	-.106	.696	.488

表3 因子相関行列

因子	1	2	3	4	5	6	7	8
1	1.000							
2	.269	1.000						
3	.355	.353	1.000					
4	-.098	-.007	-.031	1.000				
5	-.283	-.060	.010	.048	1.000			
6	-.020	.054	.016	-.165	.186	1.000		
7	.166	.302	.040	.032	.112	.092	1.000	
8	.425	.339	.316	-.183	-.144	.109	.244	1.000

クラスター分析の結果における Rescaled Distance Cluster Combine (以下、RDCC) 7での五つのクラスターについて述べていく。

まず、一つ目のクラスターは、「初歩的なスキル」・「高度のスキル」・「感情処理のスキル」・「攻撃代替スキル」と「共有経験」で形成され、 $\alpha$ 係数は.809であった。

KISS-18の下位尺度の4項目間は中程度から

強い相関を示し、「実習成績」とは相関が認められなかったが、対人関係を築く際に重要な要素であると考えたので、調査項目として使用することとした。「共有経験」を削除した場合の $\alpha$ 係数が.852と高くなったが、「実習成績」と相関のある「共有不全経験」と相関があり ( $r = -.31, p < .05$ )、因子分析の結果では第1因子に.664と高い因子負荷量をもっていた。また、共感援助行動の動機づけとして重要とされている(菊池, 1983, 1988)ため、調査項目として使用することにした。

二つ目のクラスターは、「現在の充実感」と「過去受容」、「目標指向性」・「希望」・「認知欲求」・「自己充實的達成動機」で形成され、 $\alpha$ 係数は.786であった。

まず、RDCC2で結合している「現在の充実感」と「過去受容」は相関があった ( $r = .45, p < .01$ ) が、「実習成績」と相関が認められなかった。また、「過去受容」を削除した $\alpha$ 係数は.808と高くなった。因子分析の結果では両者のみで第8因子を構成していた。このため「実習成績」を構成する因子を探るにあたっては不適切な項目であると考え、両者は調査から削除することにした。

次に、「目標指向性」と「希望」が結合していた。両者には相関があり ( $r = .61, p < .01$ )、「目標指向性」のみが「実習成績」と相関 ( $r = .27, p < .05$ ) があった。因子分析の結果をみると、両者は第2因子に属しており、類似した要素の質問項目である可能性があった。白井(1994)は、希望は時間的展望のどの側面とも関連するが、目標指向性は希望以外の側面と低い関連がみられるだけであり、他の側面とは異なることが示されたとしている。また、「希望」は因子負荷量が大きく(.755)、「希望」を削除した $\alpha$ 係数の方が低下したので、「希望」を調査項目とし「目標指向性」は削除した。次に、「認知欲求」と「自己充實的達成動機」は相関があり

( $r = .30, p < .05$ )、「実習成績」とは「認知欲求」が $r = .31 (p < .05)$ 、「自己充實的達成動機」が $r = .42 (p < .01)$ と相関があった。また、因子分析の結果、両者は第2因子に属しており、類似した項目と考えられたが、内発的動機づけを測定することは重要であると考えたため、調査項目として残した。

三つ目のクラスターは、「ストレス処理スキル」・「計画のスキル」・「細部への注意」・「自尊感情」・「熟慮性」・「内的他者意識」で形成され、 $\alpha$ 係数は.679であった。

まず、「ストレス処理スキル」と「計画のスキル」がRDCC1で結合し、両者は相関関係があり ( $r = .59, p < .01$ )、「実習成績」とは「ストレス処理スキル」が $r = .28 (p < .05)$ 、「計画のスキル」が $r = .44 (p < .01)$ と相関が認められた。また、因子分析の結果では、両者のみで第3因子を構成していた。このため、調査項目として残すこととした。

次に、「細部への注意」・「自尊感情」がRDCC2で結合していた。因子分析の結果では、両者のみで第4因子を構成し、「実習成績」と相関もなかったため、調査項目から削除した。

次に、「熟慮性」・「内的他者意識」がRDCC3で結合し、両者には相関があった ( $r = .31, p < .05$ )。「内的他者意識」を削除した $\alpha$ 係数は.680と若干高くなったが、この項目は「実習成績」と相関があった ( $r = .35, p < .05$ ) ため、調査項目として残した。「熟慮性」は「実習成績」と相関があった10項目のうち4項目と相関が認められた。また、因子分析の結果、「内的他者意識」は第7因子、「熟慮性」は第2因子に属していた。このため、両者は異なる要素についての質問である可能性があるため、調査項目として残した。

四つ目のクラスターは、「外的他者意識」・「競争的達成動機」・「空想的他者意識」で形成され、 $\alpha$ 係数は.559で、因子分析の結果、3項

目で第6因子を構成していた。

「空想的他者意識」のみが、「実習成績」と相関が認められず、この項目を削除した $\alpha$ 係数も.566と高くなった。このため、「空想的他者意識」は調査項目として不適切であると考え、削除することにした。

「外的他者意識」と「競争的達成動機」は相関があり ( $r=.39, p<.01$ )、両者は「実習成績」とも相関が認められた (順に $r=.47, p<.01, r=.28, p<.05$ )。また、実習は内発的な達成動機づけをもって取り組むことが多いと考えられるため、外発的な動機づけといえる「競争的達成動機」も調査項目から削除し、「外的他者意識」のみを調査項目として使用することにした。

五つ目のクラスターは、「社会的スキル」・「ADHD」・「共有不全経験」・「注意切り替え」・「コミュニケーション」・「想像力」で形成され、 $\alpha$ 係数は.123であった (社会的スキル・共有不全・想像力・ADHDは逆転項目として処理した)。

「社会的スキル」と「ADHD」はRDCC 2で結合し、そこに「共有不全経験」がRDCC 3で結合していた。「実習成績」との関係では「共有不全経験」は相関が認められ ( $r=.31, p<.05$ )、「社会的スキル」と「ADHD」は相関がなかったが、「共有不全経験」と相関が認められた (順に $r=.46, p<.01, r=.39, p<.01$ )。また、「社会的スキル」と「ADHD」は相関があり ( $r=.48, p<.01$ )、類似した要素を測定している可能性があった。このため、「共有不全経験」と相関が低く、因子分析結果から第1因子における因子負荷量の小さい「ADHD」を調査項目から除外した。

次に、「注意切り替え」と「コミュニケーション」がRDCC 2で結合し、そこに「想像力」がRDCC 4で結合していた。

「コミュニケーション」は項目を削除した $\alpha$ 係数が.383と高くなり、因子分析の結果におい

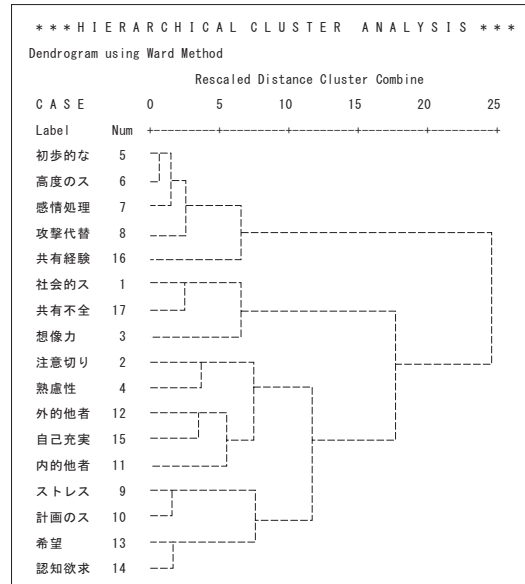


図4 第2回クラスター分析結果

ても第1・5因子に.40以上の因子負荷量を持ち、「実習成績」とも相関がなかったため、調査項目から削除した。

「注意切り替え」と「想像力」は異なる因子に属していたが相関があり ( $r=.29, p<.05$ )、「実習成績」と相関のあった10項目とも相関が認められた。このため、調査項目として使用することとした。

このような取捨選択の結果、使用する項目の候補として、「初歩的なスキル」・「高度のスキル」・「感情処理のスキル」・「攻撃代替スキル」・「ストレス処理スキル」・「計画のスキル」「共有経験」・「共有不全経験」・「希望」・「自己充實的達成動機」・「熟慮性」・「認知欲求」・「内的他者意識」・「外的他者意識」・「社会的スキル」・「注意切り替え」・「想像力」の17項目をあげた。

再度、17項目のデータを用いてクラスター分析 (Ward's法) を行った。デンドログラムは図4に示す通りである。

その結果、RDCC10におけるクラスターは4つとなった。一つ目のクラスターは、「初歩的

なスキル」・「高度のスキル」・「感情処理スキル」・「攻撃代替スキル」・「共有経験」で形成され  $\alpha$  係数は.809、二つ目のクラスターは「社会的スキル」・「共有不全経験」・「想像力」で形成され  $\alpha$  係数は.517であった。「想像力」を削除した  $\alpha$  係数は.625となったため、削除して再度クラスター分析を行ったところ、クラスターに変化はなかった。三つ目のクラスターは「注意切り替え」・「熟慮性」・「外的他者意識」・「自己充實的達成動機」・「内的他者意識」で形成され  $\alpha$  係数は.608、四つ目のクラスターは「ストレス処理スキル」・「計画のスキル」・「希望」・「認知欲求」で形成され  $\alpha$  係数は.705であった。16項目全体の  $\alpha$  係数は.781であった。

## 考察

結果から、理学療法士を目指す学生の心的要因のクラスターは4つあることが示唆された。

一つ目のクラスターは、「初歩的なスキル」・「高度のスキル」・「感情処理スキル」・「攻撃代替スキル」・「共有経験」で形成されていた。角田（1991, 1994）は主体の能動的な関与なしに共感はあると示している。「初歩的なスキル」と「高度のスキル」は他者に能動的に働きかける際に必要なスキルの程度を測っており、「感情処理スキル」や「攻撃代替スキル」も他者とのコミュニケーションのなかで発揮されるスキルを測るものである。一方、菊池（1988）は情動的共感性尺度とのKiSS-18の間にははっきりとした関係が見られなかったことから、社会的スキルと相手と同じ気持ちになることはあまり関係がない可能性を示唆している。このため、「共有経験」は少し離れた位置で結合したものと考えられる。これらのことから、一つ目のクラスターは「コミュニケーションに関するクラスター」といえると考えられる。

二つ目のクラスターは、「社会的スキル」・

「共有不全経験」・「想像力」で形成されていた。「共有不全経験」は、自他の個別性を測定しており、「社会的スキル」は雑踏や協働を嫌う傾向を測定している。自他の個別性の傾向が極端に強くなると、雑踏や協働を嫌うことも考えられるため、この2項目は結合したと考えられる。この2項目と、他者の感情や視覚的イメージへの想像力が乏しい傾向を測定している「想像力」は無相関で、クラスター分析でも少し離れた位置にあり、「想像力」を削除した  $\alpha$  係数も高くなった。他者の感情推測や視覚的イメージを用いた想像力の乏しさと、自他の個別性や雑踏や協働を嫌う傾向はあまり関係がないことが示されたため、二つ目のクラスターは、「個別性に関するクラスター」といえると考えられる。

「共有不全経験」と「共有経験」の得点は  $28.0 \pm 9.57$  点、 $40.60 \pm 10.86$  点で、「共有不全経験」の方が低く、両者の相関は  $-0.31$  ( $p < .05$ ) であった。角田（1994）は自己と他者の個別性の認識が確立されていることによって、共有体験が他者理解につながるとしている。また、「共感者」は共有経験と共有不全経験の両方が高いとし、未熟な共感をもつ「同情者」は共有経験が高く共有不全経験が低い傾向にあるとしている。被調査者は発達段階にある青年であり、未熟な共感をもっていると考えられる。本研究において「共有不全経験」は「実習成績」と正の相関があった ( $r = 0.31$ ,  $p < .05$ )。これは、自他の個別性が高い者が実習成績の高いことを示唆している。理学療法士は客観的に対象者を評価しなければならないため、同情的な共感よりも、自他の個別性が高い「真の共感」をもつ必要があると考えられ、「実習成績」の高い被調査者も「真の共感」をもつ傾向にあるのかもしれない。

また、本研究では「共有経験」と「共感不全経験」は異なるクラスターに属していた。萩島（2000）の指摘する現代青年の特質、「他者との

人間関係が希薄でありながら、孤独でない状態を維持するために小集団に身をおく傾向」が現れた結果かもしれない。

三つ目のクラスターは「注意切り替え」・「熟慮性」・「外的他者意識」・「自己充實的達成動機」・「内的他者意識」で形成されていた。「注意切り替え」は、同一性の保持を好む傾向や易パニック傾向、慎重さ、没頭傾向、同時処理が苦手な傾向を測定するものである。「熟慮性」は、より多くの情報を収集したうえで、慎重に結論を下す傾向を測定している。両者にものごとに対して慎重であるという要素が含まれているためこの2項目が結合したものと考える。

「外的他者意識」は他者の服装・体形などの外面に現れた特徴への注意や関心の程度を測定し、「内的他者意識」は他者の気持ちなどの内面情報を敏感にキャッチし、理解しようとする意識や関心の程度を測定している（辻，1993）。「自己充實的達成動機」は、個々がそれぞれ自己を高めるという、いわば達成動機の源ともいえる動機づけの程度を測定しており（堀野，1994）、これは内発的動機づけと考えられる。二つの他者意識が「自己充實的達成動機」に正の相関があったのは、①理学療法士が現前の対象者の内面に意識を向けながら、医療技術専門職として対象者の障害を適切に評価するために、外見的特長のアライメントや動作を的確に観察し、分析できなければならないこと、②多くの学生が理学療法士になりたいといった価値観や信念を持って養成校に入学し、内発的動機づけをもっていることの表れだと考えられる。

これらより、三つ目のクラスターは「対人関係のなかで熟慮し、内発的達成動機をもつことに関するクラスター」といえると考えられる。

四つ目のクラスターは「ストレス処理スキル」・「計画のスキル」・「希望」・「認知欲求」で形成されていた。「ストレス処理スキル」は他者からの非難や矛盾した話をうまく処理するス

キルの程度を測定し、「計画のスキル」は仕事（学業）上の問題解決スキルの程度を測定している。つまり、両者は大きく捉えると問題解決スキルといえるものである。このため、両者は正の相関があり、日々問題解決の場である実習の成績である「実習成績」とも相関があったものと考えられる。

「認知欲求」は努力を要する認知活動に従事したり、それを楽しむ内発的な傾向を測定しており（神山・藤原，1991）、「希望」は未来への見通し（時間的展望）を測定している。この2項目が結合したのは、大学生における進路決定自己効力と未来に対する見通し（時間的展望）が密接な関係を持ち、過去や現在よりも、未来がより優勢であるほど進路決定自己効力が高いとされている（富安，1997）ためだと考えられる。被調査者が早期から職業選択し進路決定をしているのは、成熟した未来への見通しと、平素からものごとをよく考えている賜物と考えられる。これらより、四つ目のクラスターは「仕事（学業）に関するクラスター」といえると考えられる。

最後に、第2回クラスター分析結果のデンドログラムを鳥瞰すると、「コミュニケーションに関するクラスター」と「他者との関係性に関するクラスター」、および「内発的達成動機・仕事（学業）に関するクラスター」の3つで形成されていることがわかる。

中谷（2006）は社会的責任目標が教室内の人間関係を媒介して学業達成に至るプロセスを提起し、人間関係と動機づけを有機的に結びつけている（図5）。これによると、教室内の規範に適応的である社会的責任目標（教室における規範やルールを守り、対人的に円滑な関係をもとうとする目標）をもつ児童は、教科学習に対しても動機づけられるようになる可能性があるとしている。

青年期の社会的発達にとっても、友人関係が



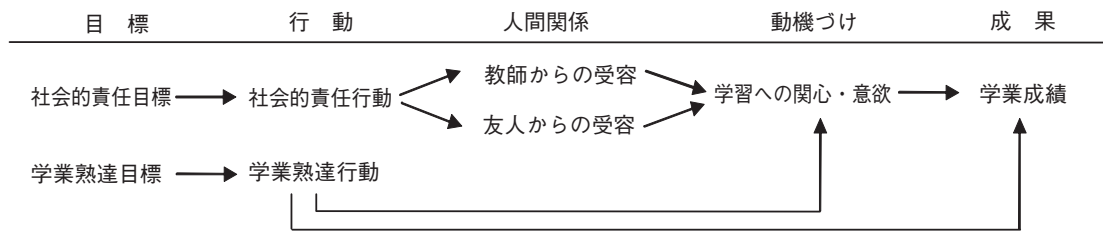


図5 社会的責任目標が学業成績に影響を及ぼすプロセス (中谷, 2006)

①安定化の機能、②社会的スキルの学習の機能、③モデルの機能をはたし、重要な意味をもつとされている (藤田, 2002)。また、身近な大人の観察やモデリングが向社会的行動の発達に重要であるとされている (菊池, 1988)。

これらのことを考えると、自己受容が保障された暖かな人間関係が観察・模倣学習を加速させ、向社会的行動や社会的スキルを身につかせるとともに、内在化された動機づけや健全な自己効力感を育み、学業成績向上の好循環を生み出すといえる。本研究の結果も「人間関係」・「動機づけ」・「学業成果」の有機的結びつきを裏づけるものと示唆される。

#### 文献

藤田文 2002 社会性の発達. 弓野憲一 (編) 発達・学習の心理学 ナカニシヤ出版 Pp.65-79.

萩島久裕 2000 情意領域の教育 (社)日本理学療法士協会 (編) 臨床実習教育の手引き 第4版 Pp.53-61.

堀野緑 1987 達成動機の構成因子の分析—達成動機の概念の再検討— 教育心理学研究,35,148-154

堀野緑 1994 達成動機の心理学的考察 風間書房

角田豊 1991 共感経験尺度の作成 京都大学教育学部紀要37,248-258

角田豊 1994 共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み 教育心理

学研究,42,193-200

神山貴弥・藤原武弘 1991 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究,6,184-192

菊池章夫 1983 向社会的行動の発達 教育心理学年報,23,118-127

菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店

前田智香子・吉良陽子 2007 理学療法士養成校の臨床実習成績における因果モデル 関西大学文学部心理学論集,1,30-33

中谷素之 2006 動機づけ—情意のはたらき— 鹿毛雅治 (編) 朝倉心理学講座 8 教育心理学 朝倉書店 Pp.120-137.

大橋ゆかり 2000 総論 (社)日本理学療法士協会 (編) 臨床実習教育の手引き 第4版 Pp.1-11.

(社)日本理学療法士協会 2007 協会について—資料・統計— 2007年3月 <<http://www.soc.nii.ac.jp/jpta/>> 2007年12月10日参照

白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究,65,54-59

白井利明 1997 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房

高橋宗 1994 覚え、考え、創造するとは 倉戸ツギオ (編) 発達と学習の心理学—自己教育力をはぐくむ ナカニシヤ出版 Pp.91-114.

滝間一嘉・坂元章 1991 認知的熟慮性—衝動性尺度の作成—信頼性と妥当性の検討.

- 日本グループダイナミクス学会第39回大会  
発表論文集,39-40
- 富安浩樹 1997 大学生における進路決定自己  
効力と時間的展望との関連 教育心理学研  
究,45,329-336
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路  
書房
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知  
された自己の諸側面の構造 教育心理学研  
究,30,64-68.
- 山際勇一郎・田中敏 1997 ユーザーのための  
心理データの多変量解析法 教育出版  
Pp.23-51.
- 若林明雄 2003 自閉症スペクトラム指数  
(AQ) 日本語版について—自閉症傾向の  
測定による自閉性障害の診断の妥当性と健  
常者における個人差の検討— 自閉症と  
ADHDの子どもたちへの教育支援とアセ  
スメント Pp.47-56
- ウェンダー,P.H. 2002 福島章・延与和子(訳)  
成人期のADHD—病理と治療 新曜社